

平成30年6月25日現在

機関番号：84602

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07273

研究課題名(和文)サーフィン文化の起源を探る-土器編年からのアプローチ-

研究課題名(英文) Exploring origin of Sa Huynh culture by chronological and typological research on pottery

研究代表者

鈴木 朋美 (Suzuki, Tomomi)

奈良県立橿原考古学研究所・その他部局等・技師

研究者番号：00778673

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：甕棺葬を特徴とするベトナム中部のサーフィン文化の起源を探るべく、指標遺跡が存在するクアンガイ省での先サーフィン段階とされる遺物と起源に影響を与えたとされるパウチョー文化の遺物の観察と実測を行った。その結果、今まで確認できていた3系統の甕棺とは別の系統の甕棺が存在することが明らかになった。また、パウチョー文化の土器には、サーフィン文化との類似性を示唆する要素が少なく、むしろ差異性が顕著であることがわかった。以上より、ベトナムのサーフィン文化は中部中域の新石器時代を基礎としており、他の地域から影響を受けて成立した可能性は考えられにくいという結論に至った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was exploring the origin of Sa Huynh Culture which is characterized by the burial practice with large-sized jar in central part of Vietnam. I focused on pottery of Pre-Sa Huynh period in Quang Ngai province and of Bau Tro culture which is discussed as an influencing factor of formation of Sa Huynh culture. Observing and drawing these groups of pottery provided two results. Firstly, in addition to 3 trends which I suggested in jar burial typology of Sa Huynh culture, another trend was found in Quang Ngai province. Secondly, pottery of Bau Tro culture showed a distinct difference from that of Sa Huynh culture. These results suggests that Sa Huynh culture could be formed on the neolithic material culture in the central part of central Vietnam as a cultural basis. Further, it is difficult to say that Bau Tro culture had a role as an influencing factor.

研究分野：ベトナム考古学

キーワード：サーフィン文化 甕棺墓 ベトナム 先史時代 考古学 型式学

1. 研究開始当初の背景

甕棺葬とは、大型の土製容器に遺体を埋納する埋葬方法で世界で広く確認される先史時代の埋葬方法のひとつである。東南アジアでもベトナム、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシアと広域で確認され、中でも先史時代の甕棺葬が最も多く確認されているのがベトナムである。

ベトナムで甕棺が出土する遺跡は中部から南部の沿岸部に集中し、甕棺墓遺跡が属する考古文化はサーフィン(Sa Huỳnh)文化と総称され紀元前5世紀～紀元後1世紀頃に比定されている。サーフィン文化の最大の特徴とされる甕棺は胴が長く帽子形の蓋を併せ持つ場合が多く、土中への埋置方法は立位である。甕棺には主に土器や鉄器が副葬されるが、他地域との交流を思わせる遺物(軟玉製耳飾り、インド産メノウ製ビーズ、中国製銅鏡など)も副葬されるため、海洋文化の性格が強いとされる(山形眞理子 2007「ベトナムの甕棺葬—その起源に関する予察—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第52輯、pp.97-115)。現在は新たな遺跡の発見が続き、研究は活況を呈しているように見える。しかし、文化の発生から衰退までの実態を明らかにするための、遺跡と遺物に依拠した基礎的な研究はほとんど行われていない。

一方で、ベトナム国内・国外の研究者の関心が向いているのは「サーフィン文化と他地域との繋がり」や「サーフィン文化の起源」に関する問題である。オーストラリア国立大学のベルウッド Peter Bellwood 氏に代表される、オーストロネシア語族拡散説の考古学的検証を試みる研究者らの仮説では、東南アジア各地で甕棺葬が確認されるのはオーストロネシア語族が甕棺葬を行っていたからであり、サーフィン文化の起源はボルネオ島方面に求められるという(Bellwood, P. 1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago* (Revised edition). University of Hawaii Press, Honolulu.)。一方ベトナムでは起源を国内に求めている。金属器を伴う典型的サーフィン文化よりも古い遺物・遺跡は「先サーフィン」と呼ばれ、前期のロンタイン段階、後期のビンチャウ段階の2期が設定された。さらに、新石器時代の甕棺墓を伴うベトナム中部高原のルンレン(Lung Leng)遺跡の調査の結果、ルンレン遺跡に表象される中部高原の文化が中部沿岸域の新石器時代の文化と融合しサーフィン文化が誕生したと提唱された(Nguyễn Khắc Sửu 2005 *Di chỉ Lung Leng, nhận thức bước đầu. Khảo Cổ Học, số 2005* (5), pp.3-14.)。しかし、前者に関しては理論仮説を裏付けるための要素としてサーフィン文化が位置付けられ、後者は遺物の詳細な比較に基づいた説ではない。サーフィン文化と捉えられている遺物の変遷やアセンブリッジが十分に把握されていない現時点で、サーフィン文化の起源問題を考えることは不可能に近い。

そこで申請者はベトナム中部の甕棺墓遺跡出土土器の型式編年作成に取り組んでいる。特に、発掘調査の情報が整っている典型的サーフィン文化の遺跡で出土する甕棺の形態に関しては型式変化を追うことができ、遺跡の時間的前後関係が明らかになりつつある。しかし、起源に関わる先サーフィンから典型的サーフィン文化への遺物の型式変化に関しては具体的な検討が不十分である。バウチャム遺跡でビンチャウ段階から典型的サーフィン文化への移行が確認されたという報告があるが、再調査の際にそのような変化は見られなかったという(山形眞理子、前掲論文)。よって現段階では先サーフィンと典型的サーフィン段階を結びつけるのは難しい状況である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、型式学を用いて甕棺葬を特徴とするベトナム中部初期鉄器時代の考古文化であるサーフィン文化の起源について明らかにすることである。前述の通り、近年はサーフィン文化の起源について外国人考古学者がオーストロネシア語族の拡散説と言うコンテキストの中で語る一方、ベトナム国内では国内の新石器時代の考古文化を起源とする説が主流である。しかし、サーフィン文化と捉えられている遺物の変遷やアセンブリッジが十分に把握されていない現時点で、サーフィン文化の起源問題を考えることは不可能に近い。そこで本研究はベトナム中部の先サーフィン段階と言われる遺跡から出土した土器について緻密な型式学研究を行い、土器編年を組むことでサーフィン文化の形成過程の描写を試みる。

3. 研究の方法

本研究ではベトナム中部沿岸部の各省(クアンナム省～ビンディン省)の先サーフィン段階の土器を対象とする。目的の達成のために[①報告書の読解・図の整理と要調査資料の見当]、[②遺跡の探訪・土器片の表採]、[③必要資料の実測]という3つの具体的手法を用いる。

分析対象である先サーフィン段階の資料は情報を十分に備えた報告が少ない上、実測図が分析に耐えられないものも存在する。ゆえに、既報の遺跡でも遺物を見直し実測する必要がある。そのために、あらかじめ現在手元にある報告書などの資料・報告書などの情報を整理して再実測や遺物番号の確認が必要な遺物の見当を付ける。

4. 研究成果

(1)クアンガイ省のサーフィン文化関連遺跡である、ゴークエ遺跡、ズオンクアン遺跡、ロンタイン遺跡の遺物の実見・実測を行った結果、以下の知見を得ることができた。

① ゴークエ遺跡の甕棺は、申請者が今まで観察を行ってきたクアンナム省、ビンディン

省、トゥアティエン=フエ省など他の遺跡の甕棺と比べて器面調整や形態に関して相違点を確認した。

まず、ゴークエ遺跡の甕棺は肩部、胴部、底部まで丸みを帯びるが、底部に向かって窄まる逆卵形を呈す。器面は成形時の叩き痕を一部すり消しているが徹底しておらず、残存する箇所は多い(図1)。実測できた3点の甕棺はいずれも上部を欠いているが、類似する特徴を備えた完形品(クアンナム省採集品)をダナン市博物館で実見することができた(図2)。また、副葬土器はビンチャウ段階及びサーフィン文化の中でも早い段階のGMV-II式に見られる特徴を備えていると判断できた

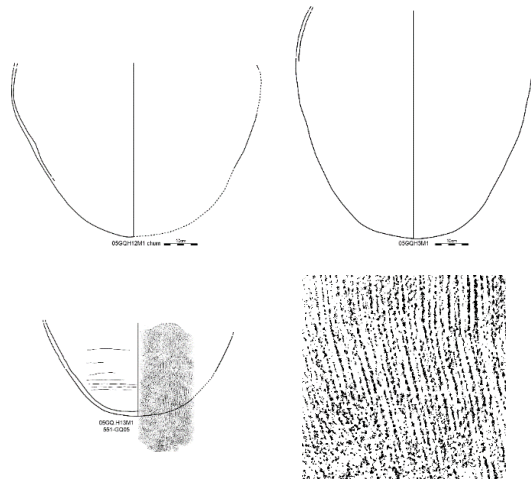


図1 ゴークエ遺跡出土甕棺実測図
(右下は左下の甕棺の器面拓本)



図2 クアンナム省出土甕棺(採集品)

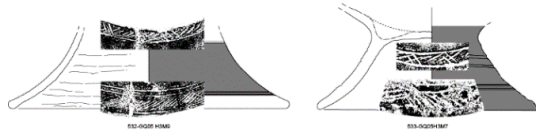


図3 ゴークエ遺跡出土副葬土器実測図
(グレー部分は黒色による彩色部分)



図4 ゴークエ遺跡出土副葬土器

(図3、4)。3系統の甕棺において、現時点で上記の特徴は確認できない。したがって、時間的変遷を辿ることができる3系統の甕棺以外に、新たな系統が存在するということが明らかとなった。

② ズオンクアン遺跡の遺物に関しては、カーネリアンビーズ、鉄器、耳飾りなどを観察できた。特に耳飾りに関しては新形式の個体の存在を確認できた。ガラス製で、細い塊状耳飾りに3つの突起が付す。ガラス製の有角状耳飾りは他の遺跡でもまれに出土するが、このような形態のものは稀有である。

③ ロンタイン遺跡に関して、現地博物館での実測はかなわなかった。しかし、現地で収集した追加資料をもとに、ロンタイン遺跡出土副葬土器と甕棺の詳細な分析を行った。その結果、甕棺に関して口縁部の形態的は形式的な差異がみられるものの、胴部についてはゴークエ遺跡のものと近いということが明らかとなった。

(2) ベトナム中部北域各省に分布するバウチャー文化関連遺跡の出土遺物の観察・実測を行った結果、以下の成果が得られた。

①クアンビン省博物館の展示は改修中であつたため、完形土器などは見られなかった。また、「サーフィン文化に影響を与えた」物証とされる黒色彩色土器の観察を申請したが、博物館側の諸事情により実見はかなわなかった。しかし、バウチャー遺跡(バウチャー文化の指標遺跡)、コンネン遺跡出土の遺物を観察・実測できた。その結果、[1]土器の破片資料の多数が縄蓆文、刻線文、押圧文を持つ、[2]黒色彩色土器が僅少である、ことを確認した。

②①で確認した破片資料のうち縄蓆文に関しては、縄目が粗であるものと密であるものが存在することが明らかとなった。図5に示



図5 バウチャー文化の縄蓆文と縄目の模式図

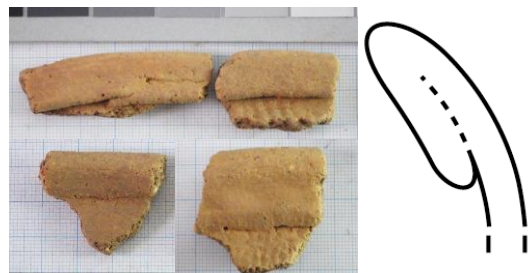


図6 バウチャー文化の土器口縁部と断面模式図

した通り粗密の差は明瞭である。

③①で確認した破片資料のうち、口縁部と思しきものは、口縁端を外に折り畳めるようにして肥厚させているものを数点確認できた(図6)。これはサーフィン文化が集中して分布する地域の新石器時代の土器には見られない技法である。

④クアンチ省博物館では、予想以上の量の青銅製品が収蔵されていた(図7)。職員に聞き込みを行ったところ、クアンチ省西部、ラオスとの国境付近で出土した遺物であるとの情報を得た。クアンチ省はラオス南部のサバナケット州と国境を共にするが、この州では近年先史時代の銅鉱山跡や青銅製品が発見されている。また、国境付近はいくつかの少数民族が国境を越えて居住している。現時点で、クアンチ省で出土する多くの青銅製品はサバナケット州から来た可能性も十分に考えられるであろう。本テーマとの関係は薄いですが、東南アジア考古学にとって発展性のある興味深い情報であるため記載しておく。



図7 クアンチ省山間部収集青銅器

(3) 本研究成果を踏まえると、編年的位置づけが明確でなかったクアンガイ省のゴークエ遺跡の遺物について型式学的な検討を行った結果、先サーフィン文化のビンチャウ段階～サーフィン文化初期段階である GMV-II 式の遺物が伴うことが判明した。さらに、甕棺の形態分類的における新たな系統が存在する可能性が見えてきた(表1)。

表1 各地域の文化・遺跡と各甕棺系統の時期的空間的關係

	後期新石器時代	金属器時代	
中部北域	バウチョー文化 (バウチョー遺跡、 コンネン遺跡)	サーフィン文化と ドンソン文化の中間様式? (バイコイ遺跡)	
中部中域	新石器時代文化? (ロンタイン遺跡、 ルンレン遺跡)	多条口縁系統(フエ省)	サーフィン文化圏
		無稜系統(クアンナム省)	
		逆卵形系統(クアンガイ省)	
		有稜系統(ビンディン省)	

また、当初予定していた調査を行えなかったため、平成29年度は調査対象を若干変更し、サーフィン文化の起源について提唱されている他地域からの影響について直接検討を行う方向性で分析を行った。その結果、サーフィン文化への直接的な影響を示唆する

ような技術・意匠などは確認できず、既存の研究で言及されるようなバウチョー文化がサーフィン文化に影響を与えたという説に対して肯定的な見解を出すには至らなかった。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 朋美 (SUZUKI, Tomomi)

奈良県立橿原考古学研究所・調査部調査課・主任技師

研究者番号：00778673